【学力向上フロンティアスクール用中間報告書様式】（小学校用）

都道府県名	山　梨　県

Ⅰ　学校の概要（平成１５年４月現在）

学校名	甲府市立朝日小学校								
学　年	１年	２年	３年	４年	５年	６年	特殊学級	計	教員数
学級数	１	２	２	２	２	２	１	１２	１９
児童数	３０	６５	５４	４９	４１	６３	２	３０４	

Ⅱ　研究の概要

１．研究主題

楽しく生き生きと学びあう子どもの育成
「確かな学力」の向上をめざした豊かな実践

２．研究内容と方法

(1)　実施学年・教科

・全学年・算数
児童の理解の状況に差が出やすい教科であり、学校全体での取り組みができるため。
また、算数の学習で育む数学的な考え方・技能などは、すべての学習活動や日常生活における基礎的な能力の一つであると考えたため。

(2)　年次ごとの計画

平成14年度	○テーマ　楽しく生き生きと学びあう子どもの育成 ○仮説 子どもの学力向上の原動力となるのは,子どもたち自身の「意欲」である。その意欲を育み、引き出す授業実践や日常活動を積み重ねることによって、子どもの主体的に学習しようとする態度が期待でき、やがて、子ども自身の全人格的な成長の礎となる「生きようとする力」を高めていくことができるであろう。 ○研究方法・内容 ・「『学力』をどうとらえるか」についての共通認識と確認。 ・子どもの学習に対する「意欲」の意味とそのとらえ方。 ・子どもの実態把握のための学力検査の実施。 ・子どもを「学校と家庭で育てる」というスタンスから考えた、新しい通信表のあり方。 ・ＴＴを中心に、子どもたちの「意欲」の醸成と、個に応じ、個を生かす学習活動をめざした授業改善への取り組み。 ・担任の願いと創意による子どもの実態に即した学級・学年の日常実践。

平成15年度	○テーマ　楽しく生き生きと学びあう子どもの育成 ○仮説 子どもの学力向上の原動力となるのは、子どもたち自身の「意欲」である。その意欲を育み、引き出す授業実践や日常活動を積み重ねることによって、子どもの主体的に学習しようとする態度が期待でき、やがて、子ども自身の全人格的な成長の礎となる「生きようとする力」を高めていくことができるであろう。 ○研究の内容・方法 ・算数科における複数教師によるきめ細かな指導・支援による授業改善への取り組み。 ・高学年における教科担当制の試行。 ・子どもを「学校と家庭で育てる」というスタンスから考えた、新しい通信表のあり方。

・子どもの実態把握のための学力検査の実施。

＊　今年度、教科担当制を試行した。

本校では、教科担任制の必要性を生徒指導（指導困難・学級崩壊）、教科指導（確かな学力、学力低下）、開かれた学級（学級王国、合同授業）、この三つの視点から考えている。それを生徒指導の充実、学習指導の工夫と改善、ＴＴや協同指導で対応しようとするものである。学習の主体である子どもたちには、「身近に相談できる学級担任」と「おもしろくてよくわかる教科担当」と「いろんな個性を持つ朝日の先生」の存在が共に必要である。

学びの原動力としての「学ぼうとする意欲」を常に刺激するためには、より深い児童理解を基盤とした学級担任の人間性、得意な分野を魅力的に指導する教科担当の専門性、そして、学級担任と教科担当とＴＴ担当が見守る多面性を常に融和させることが必要である。それを子どもたちの学びに浸透させる（自らの学びに生かす姿勢を持つ）学習指導体制や指導方法としての教科担任制をめざしている。これは、学力向上のために教師の得意な分野を活用した「教科担任制」の役割以上の期待を込めて、「朝日の教科担当制」として研究を進めている。

この研究は、その分野の専門家がいない場合では、ＴＴが組めない人員配置でも、一部の教科を担当し合うことによって広がり深まる児童理解を基盤にしながら子どもの学習への意欲化が図られることと、得意分野を持つ教員がいる場合では、その専門性からその教科等の本質や指導方法について学べる機会にもなり互いの研修としても充実できるものと考えている。

具体的には、高学年（4・5・6年）を中心に実施した。

4 年生・・・二人の学級担任が学年内で、一方が社会、他方が理科を受け持って授業を行う。

5・6 年生・・二つの学年にまたがって、4 人の学級担任が専門性や得意な分野を生かして、社会・算数・理科を受け持ち、この３つの教科について５・６年の全ての学級で授業を行う。

教科担当制のねらいとして次の４点を考えた。

○担当教員の得意な分野を積極的に活用することにより、「よりわかる授業」「より楽しい授業」を展開し、児童の学力向上をはかる。

○教師全体で、児童を指導する体制を整えることにより、一人の教師では気付かなかった子どものよさや指導すべき点を明らかにし、より深い児童理解と生活指導の充実をはかる。

○多くの教材研究に対する過重な負担を軽減し、担当する教科の教材研究を深められる。

○中学校での学習形態へのつながりを考慮し、戸惑いを少なくする。

平成16年度

○テーマ　楽しく生き生きと学びあう子どもの育成

○仮説

子どもの学力向上の原動力となるのは、子どもたち自身の「意欲」である。その意欲を育み、引き出す授業実践や日常活動を積み重ねることによって、子どもの主体的に学習しようとする態度が期待でき、やがて、子ども自身の全人格的な成長の礎となる「生きようとする力」を高めていくことができるであろう。

○　研究の内容・方法

・複数教師によるきめ細かな指導・支援による授業改善への取り組み。

・教科の広がりを考えた（国語科における）きめ細かな指導・支援の取り組み。

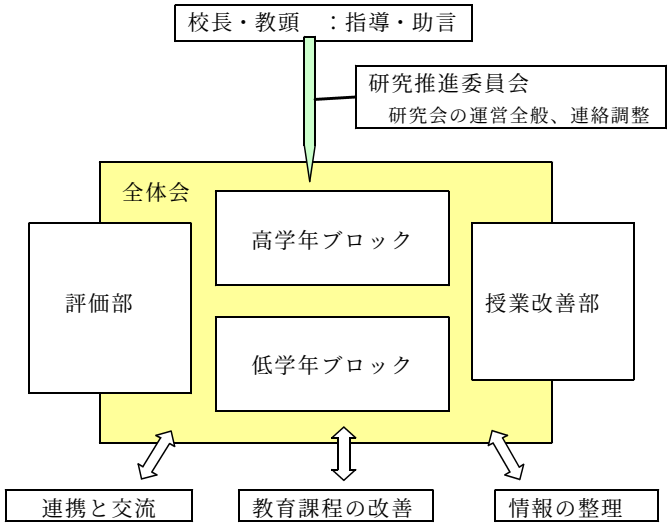
・日課表、時間割等に工夫・改善を加え、特定の教科についての教科担当制の試行。

・学力検査を継続して実施し、客観的データから子どもたちの到達度を把握し、それに応じた実践の検討。

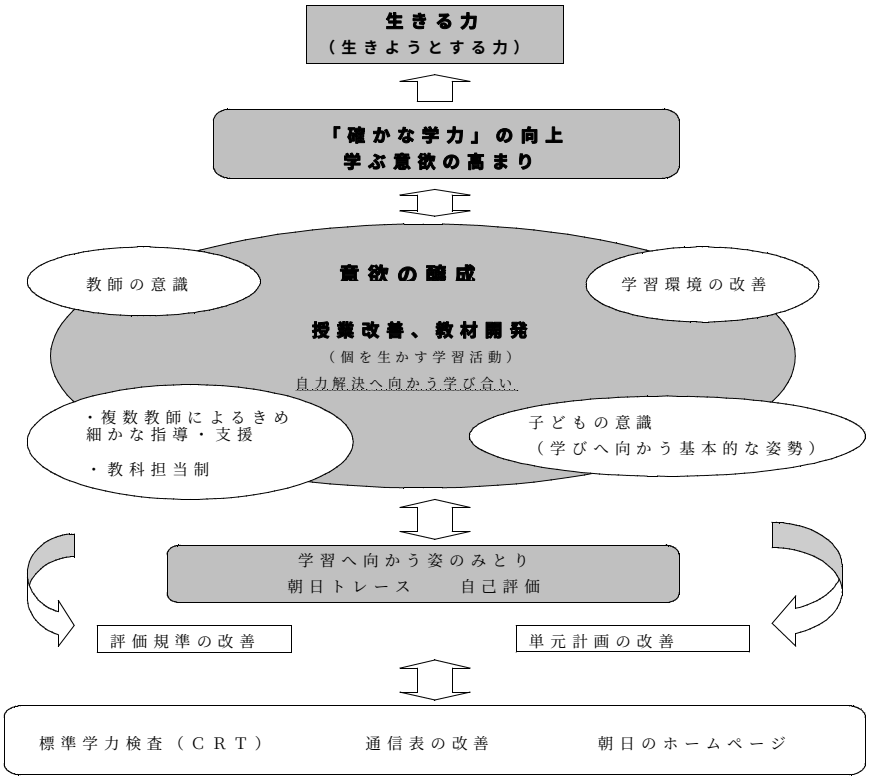
・市内の学校を対象として１１月２日に公開授業の実施。

(3)　研究推進体制

①研究組織



②研究の構想



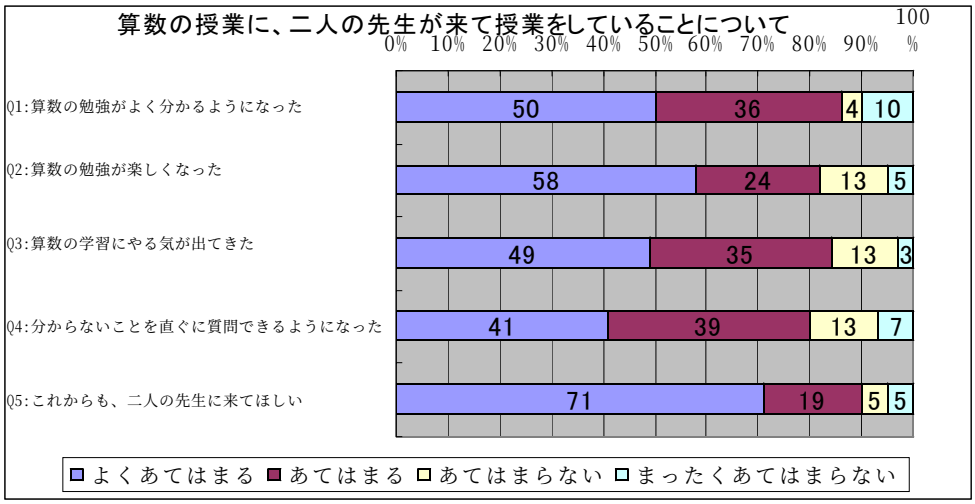
Ⅲ　平成１５年度の研究の成果及び今後の課題

１．研究の成果

「確かな学力」の向上をめざして算数を中心にＴＴ（ティームティーチング）という形で授業改善を進めたが、実践を積み重ねるにつれて、学習内容や児童の実態などによって、コース別に分けたり、少人数に分けたりして授業を展開した

方が、有効な指導･支援ができることが分かってきた。それにともない、２人の教師で学級の児童を、３～４人の教師で学年の児童をという意識が高まり、授業の展開に膨らみができてきた。
　また、子どもたちは、新しい授業の形で学習を進めることに肯定的である。

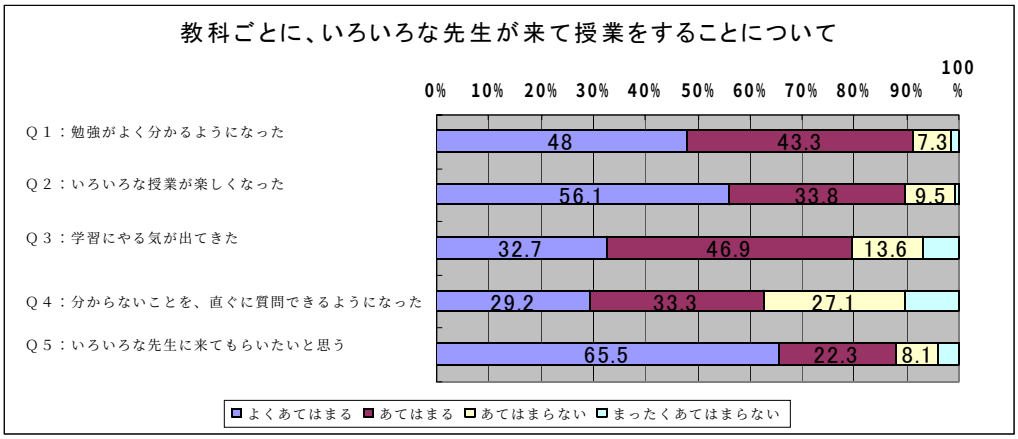
●ＴＴに関する意識調査



各項目に肯定的に答えた主な理由
・様々なやり方を聞ける。　　・２人が交互に問題を出してくれる。
・詳しく教えてくれる。　　・いっぱい問題ができる。
各項目に否定的に答えた主な理由
・一人のときとかわらない。　　・特に質問することはない。
・いつも見られている気がして集中できない。
・やり方がいろいろで、頭が混乱する。
・２人の先生がいると恥ずかしくなってしまう。
・分からないときは友だちに聞く。
・算数はもともと好きではない。

複数教師によるきめ細かな指導･支援を充実させるために、充分な打ち合わせをする時間を確保することが難しい中で実施していくには、
①　教師の個性のちがい、考え方のちがい、ものの見方のちがいなどが、授業の中で有機的に働き合って指導・支援の改善につながる取り組み
②　子どもを見る目のちがいが、児童理解へつながる取り組み
③　複数教師による指導・支援をする必然性を考えた取り組み
をしていくことが大切である。このことを踏まえてさらに授業改善をしていくことが、朝日の子どもたちの「確かな学力」の向上につながることだと考える。

教科担当制については、肯定的にとらえている子どもたちが多い。
　さらに、具体的な内容について子どもたちの声を聞くために、６年生の１クラスを対象に聞き取り調査を行った。



その結果、初めは戸惑いもあったが、前年度までの音楽科や家庭科などの交換授業と同様に受け入れ、特に利点として挙げている点は、「教科担当制だと専門的な話が聞けて楽しい」「いろいろな先生と話ができていい」ということであった。

教科担当制により、一つの教科を深く教材研究し、豊富な知識を持った先生に教えてもらうことにより、子どもたちは、興味・関心を深めることができているようだ。また、指導法の違いについては、「先生によって教え方が違うのが、楽しい」と肯定的にとらえている子どもが多い一方で、少数ではあるが、担任の先生に教えてもらいたいと思っている子どもがいるのも事実である。

教科担当制の取り組みの中で、教師の動きや子どもたちの様子から次のことを見ることができた。

●学習に向かう姿勢に主体性が感じられるようになった。

自分自身の目で時間割表を確認し、担当教師に予定や教室等を聞く姿が見られるようになった。

●様々な価値観との出合いが生まれるようになった。

複数の教師が授業にかかわることで開かれた学級が実現されてきた。子どもたちにとっては、様々な価値観と出合うことで、固定的ではない多様な人との関わり方を経験することができたと思う。

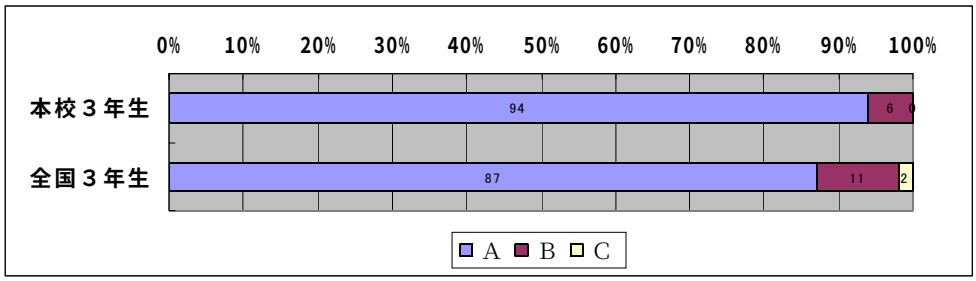
●学習指導に深まりが出るようになった。

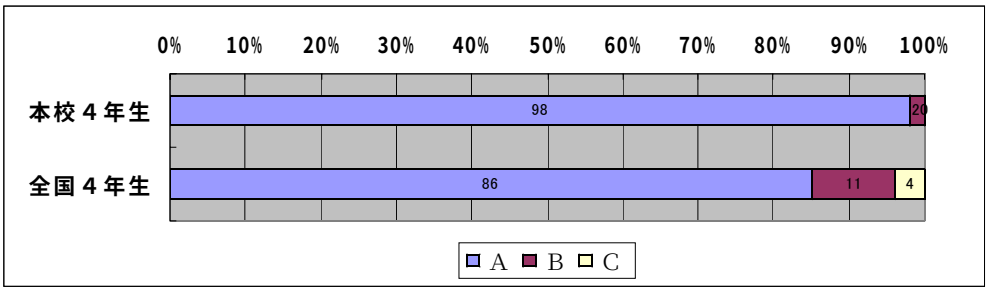
複数の学年の教科担当をすることによって、２～３学年を見通した教科指導や発展的な学習を計画することもできた。

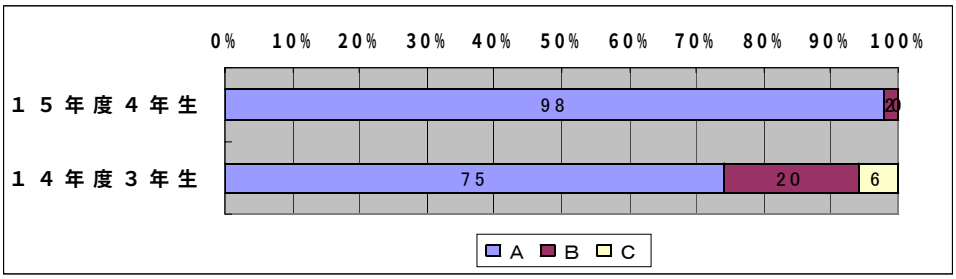
●時間割が固定化するようになった。

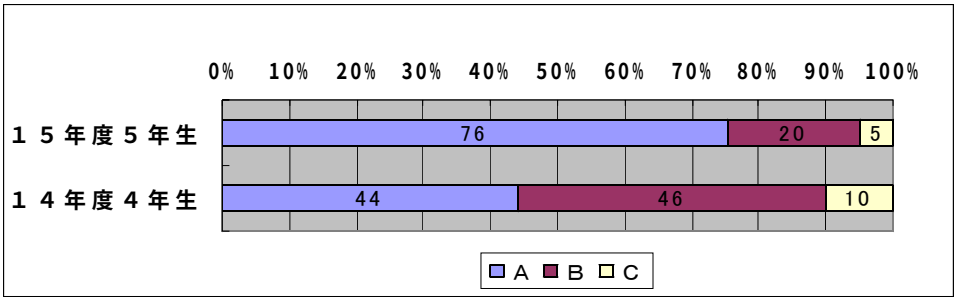
つまり、教師の専門性・得意な面が授業に生かされる、学級が多くの教師に開かれるなどの利点はある。しかし、自分の担任する学級の子どもたちを深く理解し、生徒指導する時間的なゆとりがもてない、教師のカラーが学級に反映しにくいということがはっきりしてきた。

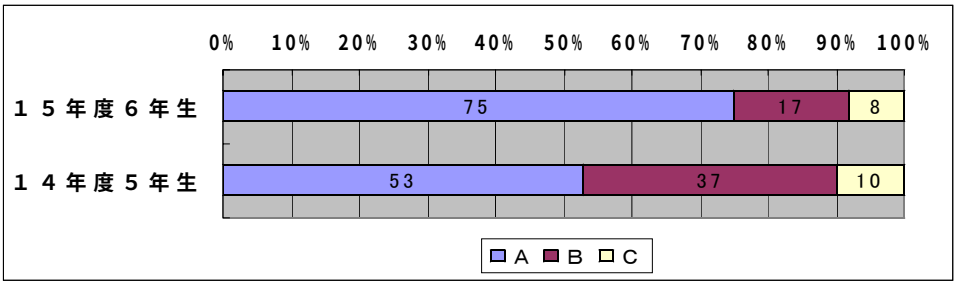
２年間にわたって数研式標準学力検査を実施したが、算数の「関心・意欲・態度」については、「Ａ」の割合が「全国」を10%以上上回ったり、前年度の結果から伸びたりしている学年があった。











授業での子どもの学びの手法や特徴をみとり、さらにはコミュニケーションの有り様から人格の理解にも努め、後の学習・生活指導に生かしていくことをねらいとした「朝日トレース」を形作ることができた。

「朝日トレース」の基本的な考え方は、「多面的に、連続的・継続的に、客観的に、情意面も含めて、評価していきたい」ということである。

朝日トレース（２年：あたらしい計算をかんがええようから）

日時	2003年10月27日	場所	２－１教室

意欲的に学ぶ子どもの姿
① 新しい計算についての説明を集中して聞こうとしている
② 自分の考えを絵・図・言葉などで表している
③ 自分の考えを絵・図・言葉などでより適切に表している
④ 友だちとかかわり合いながら学ぼうとしている

時間と主活動のながれ	抽出児童の動き・発言・コミュニケーション	意欲の現われ	思考変容のあらわれ
	客観的な記述	観察者の主観的記述も含む	発言・ノート・つぶやき・行動など客観的な記述

（考察：学びの姿全体から、その子にあった支援の方策をさぐることを前提に）

２．今後の課題

15年度の実践を省み、複数教師による指導・支援のさらなる可能性や発展的な形を模索していく中で、子どもたちの「学ぼうとする意欲」を抑えることなく、「数学的な考え方」や「自分の考えを発表する力」などの能力や様々な力を刺激するような授業改善をしていきたい。
また、教科担当制に関わって、①対象とする教科、②教科ごとの担当者の情報交換するための時間の確保、③学期末の交換授業の終わる適時性について今年度を踏まえて考えたい。

Ⅳ　学力等把握のための学校としての取組

年度初めに、国語や算数の学習内容についての理解・定着度確認と実態調査の意味で、前年度学年の学習内容による教研式標準学力検査を５月中旬に行い、全体の傾向把握や個人の理解に役立てている。

Ⅴ　フロンティアスクールとしての研究成果の普及

・今年度、市内の小中学校の「10 年経験者研修」対象者が参加する拡大校内研究会を実施した。
・来年度、市内の小中学校を対象に公開授業研究会（平成16年11月2日）を予定している。
・フロンティア事業について、ＰＴＡ等の会や学年・学級懇談会を利用して紹介し、保護者や地域の方々の理解を得てきた。さらに、複数教師によるきめ細かな指導・支援のための授業改善についても、保護者対象の授業参観を計画的に実施するなどして、理解と協力を得ていきたいと考えている。
・学校ホームページを作成し、広く情報を発信していきたいと考えている。

◇　次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。（複数チェック可）

【新規校・継続校】　□１５年度からの新規校　☑１４年度からの継続校

【学校規模】　□６学級以下　☑７～１２学級　□１３～１８学級　□１９～２４学級　□２５学級以上

【指導体制】　☑少人数指導　☑Ｔ．Ｔによる指導　☑一部教科担任制　□その他

【研究教科】　□国語　□社会　☑算数　□理科　□生活　□音楽　□図画工作　□家庭　□体育　☑その他

【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】　☑有　□無